

# 亀岡・鹿谷古墳群に関する一考察

竹村亮仁

## 1. はじめに

亀岡は京都市の北西に位置した盆地であり、古墳時代中期に千歳車塚古墳などが築造され、古墳時代後期には大堰川を境に東西に群集墳が数多く築造された地域である。盆地は周囲を山々に囲まれた閉鎖空間であり、その空間の中で一つの集団の始まりから完結までの一連の流れが見ることができるものと考えられる。今回取り上げる鹿谷古墳群に関する集団もその例外ではなく、亀岡盆地という閉鎖的空間の中において、更に行者山周辺という限られた範囲の中でその始まりと完結をみることができるのではないだろうか。

鹿谷古墳群は、亀岡市稗田野町鹿谷に所在し、行者山西側に位置する鹿谷古墳群、行者山南側に位置する鹿谷池田古墳群、鹿谷古墳群の西に位置する稗田野西山古墳群の3支群からなる古墳群であり、総数30基の古墳群である。その麓には縄文時代、古墳時代から中世までの集落遺跡である鹿谷遺跡、その東には縄文時代から中世にかけての太田遺跡がある。行者山とその南東に形成された扇状地にある2つの遺跡は集団の単位として相対的關係にあるものと考えられる。

これまでに亀岡市、京都府埋蔵文化財調査研究センターによって、鹿谷、太田両遺跡の調査が行われ、集団の変遷が明らかにされてきた。しかしながら、その集団が築造したであろう鹿谷古墳群との関係については検討された例は少ない。近年では、基礎資料として2003年にヴィクター・ハリス・後藤和雄氏によってゴーランドのコレクションの報告がなされた。その報告をもとに大英博物館に所蔵されている「ゴーランド・コレクション」と呼ばれる古墳時代を中心としたコレクションについて、考古学的な調査が実施され、日本にその成果の一端が報告されつつある。鹿谷古墳群の出土品においても全容が明らかになってきている。

本稿は、これまで行われた発掘調査成果と大英博のゴーランド・コレクションとの関係、さらに、行者山麓の集団の変遷を鹿谷古墳群との関係性を含めて検討をするものである。

## 2. 亀岡市の群集墳と集落遺跡

亀岡市には、鹿谷古墳群をはじめとした群集墳が30か所以上確認されている(第1図)。



第1図 鹿谷遺跡及び周辺古墳群分布図

- |            |             |            |             |             |
|------------|-------------|------------|-------------|-------------|
| 1. 鹿谷遺跡    | 2. 太田遺跡     | 3. 鹿谷古墳群   | 4. 鹿谷池田古墳群  | 5. 稗田野西山古墳群 |
| 6. 佐伯古墳群   | 7. 穴太古墳群    | 8. 大飼古墳群   | 9. 法貴古墳群    | 10. 慈雲寺古墳群  |
| 11. 法貴南古墳群 | 12. 法貴峠古墳群  | 13. 中岩山古墳群 | 14. 中西山古墳群  | 15. 桜峠墳群    |
| 16. 宮条南古墳群 | 17. 宮条墳群    | 18. 寺古墳群   | 19. 南条古墳群   | 20. 龍ノ尾古墳群  |
| 21. 医王谷古墳群 | 22. 風ノ口古墳群  | 23. 安行山古墳群 | 24. 案察使古墳群  | 25. 保津車塚古墳  |
| 26. 国分古墳群  | 27. 千歳車塚古墳群 | 28. 出雲古墳群  | 29. 時塚古墳    | 30. 上川関古墳群  |
| 31. 拝田古墳群  | 32. 北ノ庄古墳群  | 33. 小金岐古墳群 | 34. 北小金岐古墳群 |             |

大堰川東岸には、出雲古墳群、案察使古墳群、西岸には拝田古墳群、北金岐古墳群、鹿谷古墳群、南には穴太古墳群、法貴古墳群などがある。西岸域に位置する小金岐古墳群、拝田古墳群、鹿谷古墳群では、石柵、石障など特殊な石室構造を持つ横穴石室が8基認められる(安藤1995)。亀岡盆地は和歌山県以外で最も集中地域でもある。このことは紀氏と関係ある集団の居住が指摘される。

鹿谷古墳群周辺には、集落遺跡が推定されており、墓域と居住域としての関係が指摘され、国道9号バイパスに係る発掘調査により、集落の存在が確認され、鹿谷遺跡、太田遺跡などが報告されている(安藤1995、鶴島1992ほか)。

鹿谷遺跡は行者山南麓からの扇状地とその周辺の沖積平野に位置している。その立地は鹿谷古墳群が南に開口していることを考えると最も関係の深い集落遺跡と考えられる。鹿谷遺跡では、これまでの調査によって約40棟の住居跡が確認されている。時期分類は、『鹿谷遺跡発掘調査概要』において野島永氏、河野一隆氏によってその検討が行われている。それに由れば鹿谷遺跡はⅠ期からⅣ期に分類されている。鹿谷Ⅰ期は、土器胎土に違いがみられ、山内川水系の素地、大堰川水系の素地で製作されたものがある。両者はすべての時期に存在するが、大堰川水系の大型高杯の減少することから、行者山東麓の山内川水系の集落の新開集落と推察している。鹿谷Ⅱ期では山内川の舌状扇状地に居住域が拡大し、土器様式の変化、竈の定着などが認められる時期にあたる。さらに園部窯から製塩土器を供給し、集落の定着が指摘されている。同時期の亀岡盆地では方墳という共通の墓制を保ちながらも、小地区集団を形成し、集団ごとに他地域と交流していたと考えられる。鹿谷Ⅲ期では墓制に階層格差が著しく認められる。鹿谷古墳群、拝田16号墳にみられる石柵付の横穴式石室が紀氏に関連付けられるのであれば、在地首長層に外地の介入が推定され、横穴式石室の導入、定着は新たな集団の成立を指摘できる。鹿谷Ⅳ期では、これまで見られた集団の均質性は失われていく。鹿谷Ⅳ期末には、青野型に類する住居が出現し、これまでの住居形態は廃絶していく(野島・河野1993)。

太田遺跡では1998年の調査において、鹿谷遺跡から続く集落域が確認され、鹿谷Ⅲ期に相当するものとされた。さらに翌年には円墳、方墳が1基ずつ確認されており、これらは亀岡盆地で多く確認されていることから、亀岡盆地における在地の墓制として考えることができる。住居様式の均質性の崩壊が再度指摘された。太田遺跡では弥生時代前期から中期における環濠集落、古墳時代中期の古墳(鹿谷Ⅳ期に相当)が確認され、室町時代まで恒常的に定住していたと考えられる(岡崎1999・増田2000)。

鹿谷・太田遺跡で出土する須恵器については周辺の須恵器生産からみるに、園部窯から供給されていた可能性が高いと考えられる。

付表1 ゴーランドによる石室等測量値一覧

番号	玄室			羨道			全長	開口方向	墳丘
	長さ	幅	高さ	長さ	幅	高さ			
1	14ft 4in (4.37m)	6ft 9in (2.06m)	9ft (2.74m)	9ft (2.74m)	3ft 6in (1.67m)	4ft (1.22m)	23ft 4in (7.11m)	南 29 度西	二段丘墳丘
2	11ft 6in (3.50m)	6ft 6in ~ 8ft (1.98 ~ 2.44m)	8ft (2.44m)	18ft 4in (5.59m)	4ft 9in (1.45m)	4ft 9in (1.45m)	29ft 10in (9.09m)	南 29 度西	単円墳 (破壊)
3	12ft (3.66m)	7ft 2in (2.18m)	7ft 6in (2.28m)	22ft (6.7m)	4ft (1.22m)			西 5 度北	単円墳 (破壊)
4	11ft 9in (3.58m)	6ft 5in (1.956m)	8ft 6in (2.59m)	4ft (1.22m)	3ft (0.95m)			南 5 度西	単円墳 (破壊)
5	13ft 6in (4.11m)	5ft (1.52m)		不完全	3ft (0.96m)			南 23 度西	単円墳 (破壊)
6	10ft 10in (3.30m)	6ft (1.83m)	7ft (2.13m)	不完全	4ft 2in (1.27m)	5ft (1.52m)		南 23 度東	単円墳 (破壊)

1 f t = 0.3048 m で換算  
小数点以下第 4 位を四捨五入

### 3. ゴーランドと鹿谷古墳

鹿谷古墳群は1881年4月に地元住民により発掘された。その記録は遠藤茂平という絵師により古墳の分布図、石室絵図などが残されている(宮川2005)。

大英博物館に残された記録によると、William Gowland (以下、ゴーランド) は同年に鹿谷古墳を訪れている。6基の石室について記録し、そのうち3基には石柵が付随すると記録している。ゴーランドが残した記録は付表1のとおりである。ゴーランドの論文からは石室は南開口の両袖形で、奥壁から突出した石柵には馬具が置かれ、そのほか小玉、耳環、大刀、子持有蓋壺、蓋杯が出土していることが記されている。鹿谷古墳群のコレクションは、それまで彼が行なった東大阪市の芝山古墳のコレクションとは違い、すでに住民によって古墳から持ち出されたものを購入したものと考えられる。どのような経緯で鹿谷古墳群の情報を仕入れたのかは定かではないが、同年4月に発見された副葬品を12月に実見し、調査に訪れていることは興味深い。

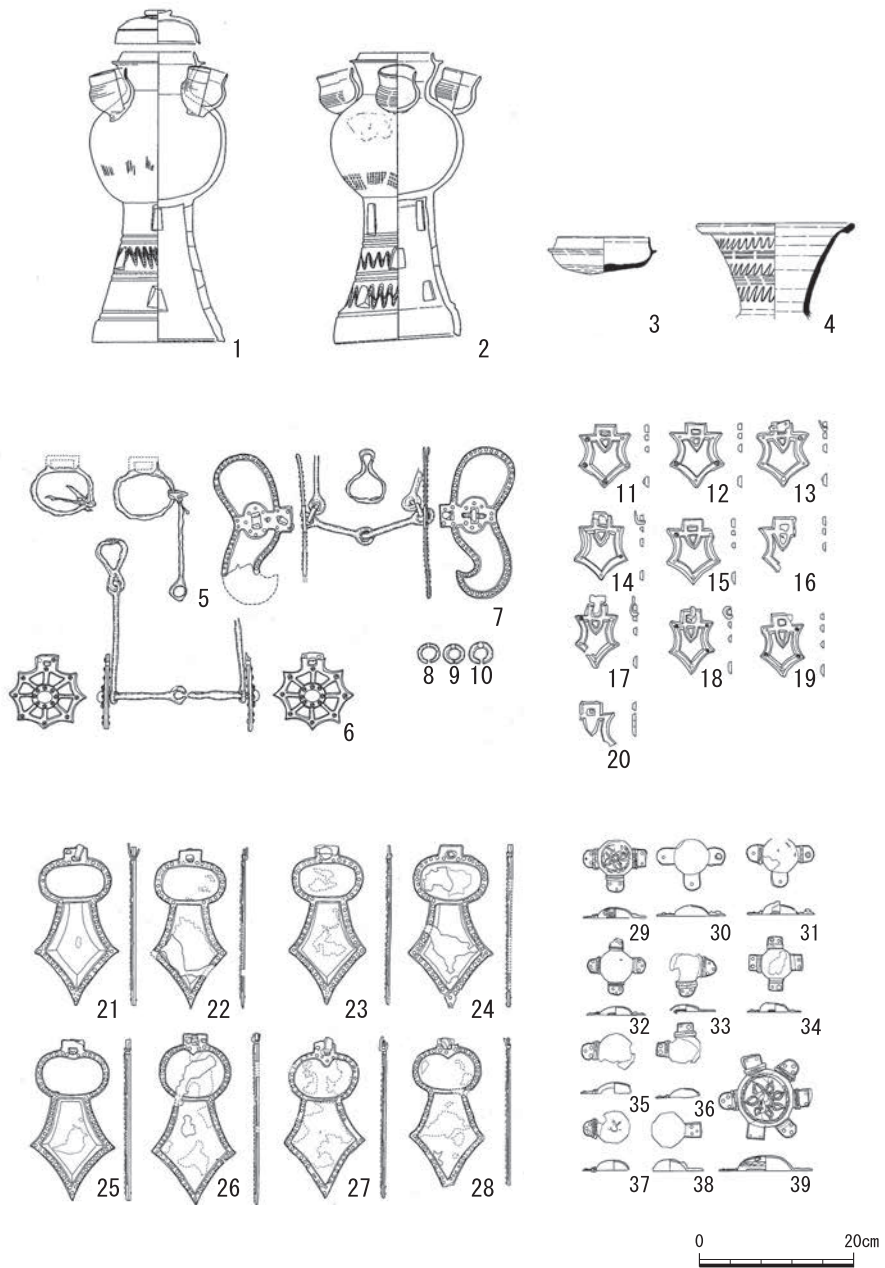
鹿谷古墳群の出土遺物は富山直人氏によって詳しく報告されている。富山氏の報告では鹿谷古墳群のコレクションとして、須恵器7点、馬具32点、耳環3点が確認されている。須恵器の内訳であるが、装飾付壺4点、蓋杯1点、杯身1点、広口壺の口縁部1点である。筆者が報告したゴーランドの須恵器リストからも同様の記述が見えられ、鹿谷古墳群から出土した須恵器は以上の7点で間違いない(表2、竹村2015)。リストに書かれた特徴(Colour ornament)には「Small vases on shoulder. all the three vases are fragmentary but the parts not found in one are found in the others so that the form can be accurately restored. The ornamentation of the surf in □□□□ to the pedestal which in pierced with □□□□ these of perforation of 4 each tier. The upper perf are long

rectangles, the others 4 sided but the side but the long sided □□□□ so much toward the summit that they are alm triangular. Between the triang perf there is in each of the two lower lines a □□□□ band of angularly waved lines mode by some comb like instrument.」とあり、肩には小型壺が付随すること、脚部には三角形透かし、波状文があることなどが記述されており、現存している装飾付壺の特徴が確認できる。ただ品目 (Description) には、装飾付壺は完形品ではなく「imperf. (=不完全)」との記述が確認できることから、もともと破片であった須恵器を購入、記録したものであり、現在大英博で公開されている装飾付壺や、大塚初重氏の実測図(第2図-1・2)は、大英博によって復元されたものである。大塚氏が実測した装飾付壺の形状、文様の技法は類似し、同一の石室から出土したものとみていいだろう。この装飾付壺の時期であるが、山田邦和氏の分類のうち、Ⅲ-1類にあたり、TK10併行期に相当するものと考えられる(山田1998)。杯身(第2図2-3)は富山氏の報告では蓋の報告がなされていないが、ゴーランドの須恵器リストでは不完全なものであるが、蓋が相伴していると記述されていることから、本来は蓋が伴うものと考えられる。時期はTK10新段階併行期のものであろう。鹿谷古墳群の馬具は、f字形鏡板付轡1組、八角花形透かし鏡板付轡1組、剣菱形杏葉8枚、五陵形透かし杏葉10点、轡1点、雲珠1点、辻金具8点、磯金具1点、覆輪1点である。これらについてはゴーランドの論文、直筆ノート(B)といわれる金属製品に関するノートに記載してされている(後藤1997)。富山氏によると2組の馬装が復元できる。時期についてもTK10新段階併行期と考えられる。(第2図-5~6、11~39、富山2009)。耳環3点(図2-8~10)については金銅製耳環である。ゴーランドの記録からは鹿谷古墳群からのものとして大刀もある(竹村2015)。

ゴーランドが記録・収集を行った古墳については、龍谷大学、京都橘大学によって調査が行われている。2009年に、龍谷大学考古学研究室のフィールドワークにより、ゴーランドが計測、撮影した石室6基の1基(Ⅳ-4号墳)を確認した(龍谷大学考古学研究室2011)。

表2 ゴーランド直筆ノート(古物A)の鹿谷古墳に関する記述

No	Description	Dimensions	locality
1	Covered vase. N.M. high pedestal. Imperf	Diam of body 21	T a m b a . R o k u y a
1a/1a	Covered vase. N.M. high pedestal. Imperf	1/2 Top □□□	dolmen Found together
2	Covered vase. N.M. high pedestal. Imperf	□ form base 2	with swords burse
3	Covered vase. N.M. high pedestal. Imperf	top of cover not	ornaments & □□
3a	Portion of bell mouthed globular vase Imperf	less thas 16in. Pedestal 7" not less than this.	□□ see collection
4	In Covered lot cover imperf	Diam 5 1/2" Ht 3"	

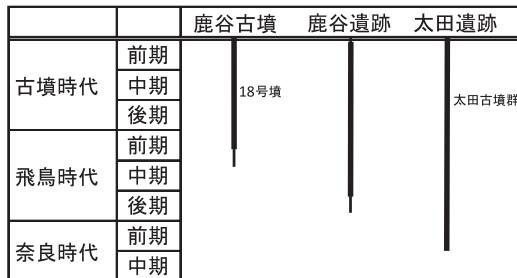


第2図 大英博物館所蔵鹿谷古墳群出土品  
 1・2(大塚2003) 3~39(富山2009)

2010年から2013年にかけて京都橘大学によって、鹿谷古墳群の測量調査が行われ、茶ノ木山支群18号墳の測量成果と遠藤の絵図との比較検討が行われた。その結果、絵図の古墳が18号墳であることが判明した。さらにこれまで、円墳と考えられていた同古墳について前方後円墳、造出付円墳である可能性が指摘された(荒木2011ほか)。両大学の調査成果は、ゴーランドの調査以降所在不明となっていた古墳を見つけ出すきっかけとして重要な成果である。

#### 4. まとめ

鹿谷18号墳は、6世紀中頃の両袖式の横穴式石室を埋葬施設とする群集墳の盟主墳であったことが指摘されている。横穴式石室は奥壁部に石柵を持ち、奥壁に沿って石障が設けられていることから横穴式石室の構築技術の面からは、紀伊及び北部九州との一定の関係



第3図 消長図

を持つものと理解されている。墳形については、二段築成の周溝の痕跡を持つことが指摘されており、さらに近年の測量調査で前方後円墳もしくは造出付円墳の可能性が指摘されている。

一方、副葬品については遠藤の絵図や、ゴーランド・コレクションなどから装飾付須恵器壺と金銅装f字鏡板付轡及び剣菱形杏葉を持つことが知られ、亀岡盆地内の一定の範囲を築造基盤とする首長墳と位置付けることができる。

亀岡盆地では特に行者山西麓から南麓にかけて古墳時代後期後半の横穴式石室を埋葬施設とする群集墳の発達が著しい。また、同時期前後の古墳として前方後円墳の拝田16号墳や群集墳中の小金岐76号墳では石柵が、拝田9号墳では石障が設置されていることが知られ、府内でも石柵と石障が最も集中する地域である。このことは行者山周辺の複数の集団においてとりわけ紀伊及び北部九州との結びつきが深いことを示している。

調査の粗密の問題はあるが、亀岡盆地ではほかに金銅装の鏡板付轡及び杏葉を持つものは知られておらず、鹿谷18号墳は周辺の鹿谷遺跡のみを築造基盤とするにとどまらず、今後、金銅装馬具や石柵等の系譜や交通的な立地条件を通じて地域の中での位置づけを検討すべき重要な古墳であることを記しまとめにかえたい。

(たけむら・かつひと = 当調査研究センター調査課調査員)

参考文献

- William Gowland 1897 「The Dolmens and Burial Mounds in Japan」 *Archeologia* 1897
- ウィリアム・ゴウランド (著), 稲本 忠雄 (翻訳), 上田 宏範 (『日本古墳文化論』創元社) 1981
- 鶴島三壽 「鹿谷遺跡平成3年発掘調査概要」 (『京都府遺跡調査概報』第48号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 野島永・河野一隆 「鹿谷遺跡発掘調査概要」 (『京都府遺跡調査概報』第52号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 安藤信策 「群集墳の展開」 (『新修亀岡市史』本文編第1巻 亀岡市) 1995
- 後藤和雄 「ウィリアム・ガウランドの業績(3) —コレクションの全容とその後の発見—」 (『月刊考古学ジャーナル』No.420 ニュー・サイエンス社) 1997
- 山田邦和 『須恵器生産の研究』學生社 1998
- 岡崎健一 「太田遺跡第8次」 (『京都府遺跡調査概報』第89号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 河野一隆 「古墳時代48 鹿谷古墳群」 (『新修亀岡市史』資料編第1巻 亀岡市) 2000
- 増田孝彦 「太田遺跡第10次」 (『京都府遺跡調査概報』第9号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- ヴィクター・ハリス・後藤和男 『ガウランド 日本考古学の父』朝日新聞社 2003
- 宮川禎一 「描かれた古墳出土品 - 明治14年の発掘調査 -」 (『学叢』京都国立博物館) 2005
- 富山直人 「ガウランドと鹿谷古墳 - 大英博物館所蔵資料の調査から -」 (『日本考古学』第28号 日本考古学協会) 2009
- 龍谷大学考古学研究室 「京都府亀岡市所在鹿谷古墳群大市支群分布調査」 (『古代学研究』第192号) 2011
- 荒木瀬奈 「鹿谷古墳群墳丘測量調査」 (『京都橘大学文化財調査報告 2011』京都橘大学) 2012
- 荒木瀬奈 「鹿谷古墳群茶ノ木山支群 18号墳測量調査」 (『京都橘大学歴史遺産調査報告 2013』京都橘大学) 2014
- 竹村亮仁 「ロンドン古物学協会ゴウランド・ノートと大英博物館ゴウランド・コレクションとの比較・照合」 (『京都橘大学大学院研究紀要』京都橘大学) 2015